



研究を志す君へ

池田 正人



麻薬は吸ったことはないが、研究にはそういう魅力があるのかも知れない。この記事を読む諸君が研究の道に足を踏み入れたのなら、自ら足を抜くことは容易ではないだろう。それほどに研究はやりがいがある。が、私には、そのやりがいより、君たちの先にどんな現実が待っているか、を知ることの方が大事と思える。そのための心構えを書いてみたいと思う。実際、研究で堂々身を立てることができる人はわずかであり、多くの人は理想と現実の狭間で悩むことになるであろうから。

企業か、大学か

20年あまり企業に身をおいた。その後、大学に移って4年が経とうとしている。1企業と1大学、風土も文化も目的も大きく異なるので、当然といえば当然だが、同じ研究活動を行うにも随分と、受ける喜びもストレスも異なっている。その経験からか、学生から研究をやるのに企業がいいか、大学がいいか、という質問を受けることがある。そういうとき次のように答えている。「企業に入って与えられた仕事に専念しなさい」と。理由は一言では言えないが、企業の方が入口も活躍の場も広いので、自分を活かす機会には恵まれよう。一方、博士号難民が増える世の中、学位はたくさん出てもアカデミアの門戸は開かれていない。運よく大学人としての職を得ても、やりたい研究を研究と呼べるレベルで遂行できる人は少数派である。それほど経済面、ゆとり面で大学の研究環境は恵まれていない。裏を返すと、良い環境で研究がしたいと思う気持ちが大きな悩みをもたらすのであり、大学に良い環境など期待しない方がいい。大学でやるからには環境のせいにしない覚悟が必要である。

企業と大学 — 研究環境の違い

企業研究は、いわば将来に対する投資であり、投じた研究費（人件費を含む）以上のリターンを要求される。リターンには他の技術開発への波及効果や宣伝効果など、目に見えにくい要素も含まれるが、現実には利益への貢献が主なノルマとなる。このため、企業では、研究の面白さばかりを追求してはいられない。「いい技術が売れるのではなく、売れる技術がいい技術」、企業は一般にそう考える。市場が変化すればテーマ変更も余儀なくされるし、成果に対する評価も変わる。企業研究者ならば、

事業縮小に伴うテーマ変更の苦い経験は誰にでもあるに違いない。

では、大学研究はどうか。企業よりはテーマ選択の自由度は大きい。目標達成のノルマも他人から押し付けられるようなことは少ない。能力があれば、研究を自分のペースでとことん追及できる環境である。設備・予算面でのベースは企業とはケタ違いに劣るが、それは一般的な話で、力があれば企業に近い環境を手に入れることは可能であろう。お金が取れる研究がいい研究という雰囲気は高まっているが、そうでない研究も研究本来の学術性を満たせば存続できる。しかし、どんな分野であれ、何かしらの一人者にならなければ研究者としての存在価値を問われるのが大学である。それが大学の厳しさであろう。大学研究者を目指すのであれば、それに耐えていけるかどうかを自分に問うてみる必要がある。

企業研究者の悩み

先日の朝日新聞に、「研究者の半数「辞めたい」経験」という記事が載った。大学より企業の方が、また、高職位より低職位の方が悩んだ経験のある人が多いとの調査結果である。理由は「将来が不安」、「実力に評価が見合わない」、「見識・学識を生かす職が他にある」、「職場に魅力が乏しい」と続く。しかし、上記の理由は研究者に限られたことではないであろう。大学研究者より企業研究者の方がそういったことに悩むとすれば、私の経験から推察するに、その理由は、企業では「自分のやりたいテーマができない」、「研究のアクティビティが低い」、「じっくり研究できない」あたりではないだろうか。「将来に対する不安」も企業研究者の方が大きいというのも頷ける。中堅研究員になるにつれ、残された研究人生がわずかになっていることへの悩みが強くなり、同時に、研究畑から離れて自分に何ができるのか、という将来への不安が高まってくる。こういった悩みの多くは、やはり企業における研究の位置づけをきちんと理解せずに大学研究の延長線で企業研究を捉えてしまっていることが原因になっているように思われる。

企業が求める人材

よく目にする事だが、会社に貢献する前に自分の希望や権利を主張する若者がいる。いずれ来るチャンスを

自ら遠ざけているようなものである。企業で研究者を志す人は、まずは、与えられたテーマに全力で取り組み、上司の「信頼を得る」ことが重要である。運よく「会社に貢献する」ことができればしめたものである。要は「会社に必要な人間になる」ことである。これが築かれれば、組織での存在感が増し、発言にも説得力を持つ。自分の主張が通りやすくなる。好き勝手はあり得ないが、会社の意向の範囲で自分の希望を主張できるようになる。結果を出し、組織に必要な人間になって初めて、その職場が自ずと良き環境となり、そこに自由（裁量の余地）が生まれる。すなわち、研究者にとっての良き環境は自分で勝ち取るものであり、最初から与えられるものではない。企業に入ると決めたからには、何でもやる覚悟、どこにでも行く覚悟を心の奥底に持っていなければならない。研究は一職種に過ぎないし、研究職に就いても企業人生の序論であることも多い。もちろん、研究がライフワークになる企業人もいるが、レアケースである。大学と違って最初から研究人生が保証されている人などいない。私が企業の人事なら、研究一本で行きますという姿勢が強い学生は敬遠するかもしれない。

企業研究者の人事異動

企業研究者にとって研究職から他の職種への人事異動はしばしば転職を考えさせるほどの一大事となる。学術報告が比較的しやすい基礎研究の部隊から、それが容易ではない工業化研究の部隊への異動ですら、深く悩んでしまう若者が少なくない。実際にそのようなケースを多々見てきたし、自分も経験したことでもある。研究とは、それが高度な研究であればあるほど、離れがたい魅力を持つ。達成感を得るまではそれを求めるし、それを得たら得たで次のより大きな夢を求めてしまう。しかし、会社は人をよく見ており、その人の育成をよく考えている。だから、自分の希望が通らないときは素直に会社の意向に従った方がいい。研究の面白さだけを経験した若者が研究者としての人生を夢見てしまうのは仕方のないことであるが、企業人としてのバランスを養うことの方が大事なケースもある。私は研究室の卒業生には自分への反省も込めて次のように助言している。「企業で研究開発に携わることができれば幸せ。まずはそれを求めなさい。でもそれは長い企業人生の一時期の話。ものをつくるとはどういうことか、その全体を理解できるようになりなさい」と。

研究を志す学生への思い

では、研究室に所属する学生にはどのような思いを持っているかと言えば、研究の楽しさと苦しみの両方を味わってもらいたい。もし、どちらか一方となるのなら、研究は楽しいものであると教えてあげたい。企業研究は、その多くがノルマを課せられて全力で走る過酷な中距離走のようなもので、研究の楽しさを味わう余裕などは減多にない。それでも研究の楽しさや喜びを一度でも経験していれば、きっと我慢強く立ち向かうことができるであろう。そのためにも、若き研究者の卵たちには是非とも成功体験を持ってもらいたい。卒論研究や修論研究では人の循環が速いので、成果が訪れるタイミングは人の巡り合わせ次第、あるいはテーマ次第というところもあるが、できれば、苦しみの果てに良き成果をつかむことができるのができれば最高である。

もう一つ言っておきたい。うまくいかない、自分の思い通りにならないとき、テーマや環境のせいにして欲しい。諸君の上司である先輩諸氏も恐らくは同様な環境で成果を挙げてきたに違いない。だから、諸君の苦戦が必ずしもテーマや環境のせいではないことを見抜いている。インパクトの大きな研究論文は潤沢な大研究室を運営する大教授からよりもむしろ比較的貧しい若い研究者から数多く生まれている。研究のアイデアは意外と満たされた環境からは出にくいものである。仮に環境のせいだとしても、組織というものはそう簡単には変わらない。そのうちに自分の研究人生の旬が終わってしまう。自分に合った環境は所詮自分でつくっていくしかない。

良き出会いのために

どんな環境でもいづれ芽を出す人は確かにいる。でも、大抵は研究者としての成功は良き指導者に導かれてのことだろう。あなたが研究者として歩む過程で良き指導者に会えることを祈りたい。人生の分岐点にさしかかったとき、その人の一言が大きな助けになるものである。しかし、いつどこでそういう人に巡り合うかはわからない。要は、巡り合ったときに相手に受け入れられる自分ができているかどうかである。そうあるために、辛抱強く日々研鑽を積むことが実は一番大事なことである。

若い諸君は、卒業して就職、転勤、出向、あるいは転職、と環境を変えていくことになるであろう。最後に、「人生はつながっている」ということを心して欲しい。次へのステップの良し悪しはその前の段階の過ごし方で決まることが多い。その時々を本気で生きることが次につながる。